



関西学院同窓会 大阪支部

INTERVIEW

<http://www.kwangaku-osaka.org>

2015.01

探訪記

FILE

No.02

関西学院大学大学院 経営戦略研究科 教授 宮本 又郎氏

歴史から見た大阪経済

——歴史的にみて、大阪が築いてきた経営力・経済力とはどういったものかというお話を聞ききたいのですが、まずは近世のことを教えてくださいませんか？江戸時代に入って日本は自国の貨幣鑄造を始めます。同時に経済活動が全国化する。この変動とはどういったものだったと考えるべきなのでしょうか？

中世においては地方分権的に日本国内の「各国」が独立していました。しかし時代とともに物流が全国規模で動くようになっていく——例えば九州や四国のお米が近畿に、その逆に近畿の手工業品が九州や四国に；専門的には商賈流通が全国的に広ま

る」というのですが、そういった状態が生じる中で、必要とされる貨幣量は増えていったわけですね。

中世までは貨幣を中国から輸入していました。ところが中国との交易が途絶えてきたこともあって、日本国内で流通していた渡来銭が古くなっていく。摩滅したものは、貨幣としての信用が落ち、交換手段としては不都合となっていきました。同時に土木技術の発展もあって、当時の日本では金銀が大増産されていました。自国貨幣を鑄造するという背景には、こういった状況があったといえます。

もう少し詳しく話をしますと、今言いました「土木技術の発展」。これには、それこそ戦国大名、近世大名の貢献が大きいです。城づくりは勿論、大きな河川の治水工事——淀川平野や尾張平野、利根川平野などの開発、技術の発達と人の動員力。そういったことは広域の地域を支配する（二国支配）といいますが、ようになった戦国大名や近世大名でなければできなかったのです。

そもそも平野部の開発というのは、戦国時代から江戸時代初期の大きな特徴といっても良いでしょう。極端な言い方ですが、中世まで日本人は山の中で生活してきたのです。それが戦国・江戸時代になってようやく平野部に下りてきたんです。その結果稲作も安定していった。当然経済が活性化します。中国からの渡来銭では足りなくなるんですね。で、金銀の大増産を目指す。一連の流れをまとめるとこういうことになりますね。

（二）で大変重要な点があるんです。当時周辺のアジアの国々も中国銭を使用していたのですが、その経済圏から日本がいち早く離脱する、江戸時代の

自国の貨幣鑄造は、これを意味したのです。特に金貨の使用。金貨を使った国はアジアには存在しなかった。現代風に考えれば「ドル経済圏」から抜け出したというほど、衝撃的な出来事であったと思われま。よく「脱亜入欧」は明治以降といわれますが、本質的にはこの時にすでに脱亜（脱中）といふべきでしょうかを果たしていたと言っても良いのではないのでしょうか。貿易関係があったので、清とオランダとは国交はあったように思われがちですが、中国とはブライバートな商人との取引だったし、オランダの場合は主室と幕府との外交関係ではなく、東インド会社との取引だったのです。正式な国交のあったのは朝鮮のみだったんですよ。あとは琉球ですよ。

——中国経済圏からの離脱には「必然」があったのでしょうか？

「倭寇」というのは「日本人の海賊」と一般には思われがちですが、その後期は中国人、朝鮮人が多かった。つまり明の国力が落ちることで、東シナ海の貿易が不安定化していったんです。朱印船や勘合貿易とはいわばパスポートをもった船の貿易だったので、そういった船を海賊が襲うと、明が征伐をする。そういうルールのもとに国際的な交易秩序が守られていたんですね。それが崩れてしまった。

もちろんその後には清が成立するのですが、清は漢民族の国ではない。そういった諸々の要素から日本は中国と国交も結ばず、経済圏からも離脱していたのではないのでしょうか。

——その新しい経済の中で力をもったのが大阪だと考えて良いのでしょうか？

大阪には4つの起源があると言えるのではないのでしょうか。まず第1は古来、難波宮ですね。（二）に都があった時期というのは意外に長いんです。当時は首都のほかに陪都と呼ばれるサブキャピタルがありました。難波宮が首都および陪都であった時期を合わせると200年くらいになるのではないのでしょうか。教科書で学んでいる中に「飛鳥時代」



関西学院大学大学院 経営戦略研究科 教授 宮本 又郎 (みやもと・またお) 氏

や「奈良時代」などはあっても「難波時代」という言葉はありません。しかし実質的にはあの時代は「難波時代」であったといってもおかしくありません。この時代の大阪は「王都」だったのです。

そしてどうして難波宮が選ばれたのかといえば、もちろん中国や朝鮮との交易がしやすいという理由があった。四天王寺などはそういった交流の中で生まれていったわけです。ですから当時の難波は国際貿易都市でもあった。これが一つ目の起源です。ちなみにその後、長岡京、平安京へと移ってゆくわけですが、長岡京は難波宮の建物をつぶして持つていったんですよ。

第2の起源はずっと後になります。石山本願寺です。余談ではありますが、石山本願寺は正式名称は「大坂本願寺」なんです。

で、どうして「石山」と言ったのかといえば、難波宮の跡に建てたからなんです。難波宮の時代の石がごろごろしていた。蓮如がここに寺を建てようとしたとき、「虎や狼の棲むようなところだ」と記しているほどですから、それほどきびれていた場所だったんです。ね、恐ろしく昔ここに都があったことなどほとんど誰も知らなかったのではないかと、しかしここに石山本願寺が建てられ寺内町となった。一大「宗教都市」となったわけですね。これが第2番目の起源。

第3は豊臣秀吉。一時的だけれど武士の政権として事実上の首都になっています。その後江戸時代を通して「経済都市」となっていく。それが第4の起源。今の大阪はこの4番目の起源の延長上にある。何も大阪「経済都市」というモノトーンで考える必要はなく、色々な役割を果たしてきた可能性の幅広い都市なんです。我々は次の起源に向かって想像力を膨らませるべきではないかとも思っています。

これが大阪の面白さなんです。不断に変貌を繰り返してきた都市。そこにはもちろん批判もあります。例えば「大阪は文化軽視である」とかね。伝統や歴史をつぶしてゆく都市だとかね。その通りだと思います。先ほども申しました4つの起源、そのすべてが上町台地から出ていますね。同じ場所、古いものをつぶしながら、全く新しいものを建てるということを何度も繰り返してきた、それが大阪の特徴だと思います。

す。ローマでも旧市街と新市街は違々。ちよつと場所を移して新しいものを建てるのが多いと思うのですが。...

——その「大阪らしさ」はいついつたころから生まれたのでしょうか。

理由となるかどうかは分かりませんが、古来大阪にずっと住んでいる人がいない、ということもあるのではないのでしょうか。大阪はよそから来た人が作った街なんです。

難波宮のあとには荒れ野だったわけですよ。本願寺も信長によって戦火にまみれた。その後秀吉、家康が復興させてゆく段階でよそから多くの商人を呼んできたんです。伏見商人、堺商人、そして近江商人が多かったようですが、要は誘致ですよ。彼らが新しい大阪を作り出した。地名としても、伏見町・安土町・備後町などがその名残として残っています。中世からの商人なんてのはほとんどいない。大阪にやってくるのは「大阪商人」になる。現代でもそれは同じで、松下幸之助といえは「大阪商人の代表」と思われがちですが、出身は和歌山。そして江崎グリコの江崎利一は佐賀県出身。コクヨの黒田善太郎は富山県。歴代の大阪商工会議所の会頭を調べてみれば、根っからの大阪人と言えは佐治敏二ぐらいではないでしょうか。つまり「よそ者が活躍できる」「よそ者が活躍することを許す」という土地なんです。

にもかかわらず、今大阪の人は「大阪」「大阪」と言ひすぎなんです。それでよそからの人には入りにくい街になってしまったんじゃないかな。大阪人が大阪を愛するがゆえに、逆にアクセスしにくい街にしてしまっている。これが一つの大きな問題になっているのではないかと思うんです。言い換えれば「本当にローカルになったのか」かもしれません。

——ローカル化への大きな引き金となったのはやはり万博ですか？

そうですね。日本の全人口に対して大阪に住んで

いる人間の割合についての統計を見れば、江戸時代は大体7〜8パーセント。幕末から明治に5パーセントに落ち込みます。それが回復して戦前には7〜8パーセント。戦中は疎開などでほとんどの大都市と同じように人口は減りますが、戦後復興して7パーセントくらいまで上昇します。で万博以降にまた下降して今は6パーセントくらい。

理由としては新幹線などのインフラの整備が大きいと思われれます。新大阪駅はある意味、東京駅西口、ともいうべきでしょう。

——そもそもかつての大阪によそから人が集まってきた魅力はどこにあったのでしょうか？

一つには近畿地方が古くから文明の中心であっ



たということがあります。もちろんそこには中国や朝鮮から入ってきた文明や技術を習得した人々がいた。農産物は地方で生産できても、武器や美術品

農機具、衣料、そういったものは大体畿内しかできないわけですよ。そういったものが欲しいから地方から人がやってきた。先ほども申しましたが、明の国力が落ちてくると、なかなか貿易が安定しない。となると武器や工芸品を買うにも直接外国から輸入するよりは、堺や近江で生産された鉄砲を買う、とかね。一言で言えば近畿地方は「技術・文明の集積」が高かったということでしょう。その流れは近世になっても同じで、江戸時代の前半、木綿製品は東側では良いものが出来なかった。灯油もそうですよ。お酒もそう。醤油もそう。

もちろんこういった技術は江戸時代の後半になれば全国に広まってくるのですが、明治に入ってから新しい西欧の技術が導入されてくると、近畿独自のポテンシャルの高さがまた幅を利かせるようになる。戦前大阪で力をもったいわゆる「系へん」。それは近畿独自の技術力の高さと、それをベースに発展した経営者のセンスが背景にあったといえるでしょう。

そういった大阪が衰退へと転じるのは、第2次大戦中を通して軍需産業⇨重工業への偏重という流れの中のことだと思えます。関西は軽工業、消費財産業に強みをもっていましたが、ここにお金や資材が回らなくなりました。もう一つは「関東大震災」ですね。この地震で京浜工業地帯は打撃を受けました。その後15年ほどは阪神工業地帯に受注が集中します。もちろんこの時に関西は潤ったのですが、京浜工業地帯はここで工場を立て直したんです。すると15年後には京浜工業地帯は新鋭工場として生まれ変わっていた。相手が生まれ変わっている間、こちらはシャカリキに旧型の設備を稼働させていたわけで、気が付くときと顧客を取られてしまった。これも衰退の原因だと言えるでしょう。

それからもう一つ。私は「400年周期説」と言っているんですが、人口重心の移動というのがあって、例えば縄文時代、人口は圧倒的に東が多かった。弥生時代になって稲作が出来、人口は西に。次に東に動くのは鎌倉時代ですね。江戸時代に入ると最初は関西に戻る。1600年ごろには西日本が55パーセント。それを境にまた徐々に東へ。1600年ごろの重心はといえば滋賀県の今津あた

りですね。それが今は岐阜県くらい。どっしてこんなことが起きるのかと言えば、あくまでも仮説ですが一点に集中して発展してゆくと、金属疲労のようなものが起きるんじゃないかということです。だから今の東京一極集中が今後、金属疲労を起す可能性がある。そろそろ西へ……そんなタイミングじゃないかと思うんですけどね(笑)。

—— 400年周期とともに、大阪の第5の起源
それを考えるうえで、今一番クリアしなければいけない問題というのが、「どういった」にあるのでしょいか？

人材の確保ですね。この点で言えばやはり関西の大学はもっと頑張らないといけませんね。九州や中国、中国地方の前途有望な青年が関西を飛び越えて東京の大学を目指すという流れを食い止めない。そのためにはどのように魅力を打ち出してゆかですかね。関西学院はアメフトが強い。アメフトに関しては全国から人が集まってきた。スポーツというのも大変大きな要素ですよ。こういったことが大切ですね。

街としても大阪には問題が多い。京都は若者にとっても、とても魅力があります。ところが大阪は？
：若い人の行きたい街としての魅力の開発とPR。とにかくそこです。

ただ現状を考えると大阪だけで打ち出すことはもはや難しいでしょう。関西全体をワンセットとして考え、そこに「大阪の特長」を際立たせるという手法で考えるべきでしょうね。ところが京都の人は大阪のことをあまりよく思っていないみたいですね。神戸の人も大阪が嫌い——僕の視点からすれば阪神間というのは明らかに大阪文化圏だと思うんです。大阪市内から阪神間に住まいを移した第一世代の人はそのように考えていた。つまり仕事は大阪、住まいは阪神間……意識としては大阪人ですね。谷崎潤一郎の『細雪』はこういう構図ですね。これが第二世代・第三世代となっていくと「自分たちは神戸人・阪神間の人間」という意識が強くなる。特に女性にその傾向が強い。

かつての船場の商人は、仕事は大阪、住まいは御

影戸屋神戸エリアで、遊びに行くとなると京都大学も京都——こういった3都市ワンセットで考えるのが普通だったのだと思います。それがどの都市も成長とともに一つの完結した存在になりたがっていった。その感覚に大阪の反応が鈍かったのでしょうか。

例えば今の京大の前身である三高もとは京都ではなく大阪の上町台地にあった。それを京都が欲しいといった。大阪の商人は「まあ、文化や教育は京都でいいか」ということでそれを譲った。で、それが京大になった。昭和期になって「やっぱり大阪にも大学いると違うかな？」という気になって、寄付を集めて新たに阪大が出来た。大阪人にしてみれば京大も「自分たちのエリアの大学」という意識が強かった。最近まで大阪の高校からの志願者が大変多かったと記憶しています。

神戸大学も同様ですね。あれは最初に「橋大学の前身の『東京高等商業学校』が出来て、一番目の官立高等商業学校を西日本に作ろう」ということになった。候補に挙がったのは大阪と神戸で、誘致合戦が始まったのだけれど、大阪はもうひとつ本腰を入れていなかったようですね。一方神戸は懸命に戦って一票差で勝ちとったんです。で、しばらくしてから大阪人は「大阪にも要るんと違っ」と言い出して、大阪高商を作ったんです。まあそついったいさつを見ていると国の方も最初は東京に官立の施設を作るとして、その後2番目を大阪に作るのはやめよ。別のところに作れば大阪は自力で作ろうとするから」と考えるようになったのでしょいか？

まあ、それはさておき、このかつての京阪神3都市の補完性をもう一度呼び起こして、3つの個性を活かした全体として3都市をワンセットとして攻めてゆく……これが最良の戦略だと思えます。

—— そついった諸々の問題点のソリューション
を見出すような研究を、関西学院大学大学院経営戦略研究科において行っているということですが、具体的には今どのような研究をなされているのでしょうか。

私は今、関学のビジネススクール(経営戦略研究

科)では「企業経営史」と「企業家論」という科目を担当していますが、関西の企業や企業家を対象とすることが多いですね。各地からやって来た人が、なぜ大阪で企業者活動を展開するようになったのかなどを講義しています。

関西学院の学生は、大阪で活動される方が多いと思いますが、どこか東京を目指したい雰囲気もあるように思います。ですから学生諸君には是非「ここにとどまって欲しい。ここでも面白いことは出来るぞ」と言いたいですね。

そついった意味では北陸新幹線……あれははらちと大阪にとつては「黄色信号」かもしれませんよ。金沢は今でも関西文化圏の色が濃いように思いますが、いよいよ東京に吸収されつつあるのかなと。日本海側いる良い人材が大学を選ぶときに東京を目指すケースが多くなるんじゃないかな。関西学院には是非頑張つて欲しいですね。

—— ありがとうございます。

2016年1月20日

場所：関西学院大学梅田キャンパス内

取材：中野曠哉

永重郎(日本レマン協会常務理事)

宮本 又郎(みやもと・またお)氏

福岡市生まれ

神戸大学経済学部卒業。同大学院経済学研究科修士課程。専攻は日本経済史・日本経営史。

神戸大学経済学部助手、大阪大学経済学部教授、同大学院経済学部助教授を経て、関西学院大学大学院経営戦略研究科教授。現在住大

阪大学名誉教授、関西学院大学客員教授、放送大学、放送大学客員教授、企業家研究フォーラム会長、大阪企業家ユニオン

副会長。

編集後記
今回は、本学経営戦略研究科(梅田キャンパス)の宮本文郎教授をお訪ねしました。

大阪の「経済圏としての歴史」のお話、大衆興味深く伺いました。そして、かつては「よき者が活躍することを許す」土地だった大阪が、「大阪」大阪と言いつつ、よきからの人を介にくくしたり、逆にローカルになってしまっているという点は、第5の大阪の起源に向けて、大事なポイントとなるのでは？
大阪人のみなさん、必読です！

編集室長 小島幸保(1995年法学部政治学科卒)